

666
102

×

複写

推薦圖書目錄

大目

666-102



1200501573913

第二十二輯

十圍本部編

66
10

昭和十五年十二月

推薦圖書目錄

第二十二輯

大日本青年團本部

はしがき

本團が青年の讀物として適當なる圖書の推薦をはじめてから既に十三ヶ年の歳月を閲したが、此の事業は毎回非常な好反響で迎へられてゐる。

圖書の推薦方法は本團に推薦委員會を設け、新刊圖書に就き毎年二回委員會を開催して、慎重審議の上青年及び青年指導者の讀物として適當なるものを推薦し、其の都度本目錄及び日本青年新聞を通じて夫々發表して來たものである。

今回の推薦圖書は本年三月以降九月までの間に出版されたものうちから、左記諸氏並に本團關係者によつて九月二十日帝國圖書館に於て、六十一冊を厳選したものである。

帝國圖書館長	松本喜一氏
日本放送協會參事	小尾範治氏
東京農業教育専門學校教授	青木誠四郎氏
文部省社會教育官	小山隆氏
帝國圖書館司書官	岡田溫氏
帝國圖書館司書	舟木重彦氏

本團よりは栗原常任理事、及び熊谷總務部長、田中參事、増谷編輯課長、其の他係員が出席した。廣く青年團並に青年教育關係方面に於いて利用せられんことを希望する。

昭和十五年十一月

大日本青年團總務部編輯課調査班



666

102

目次

修養・處世

儒教と我が國の徳教……………	諸橋 轍 次著……………(一)
道元禪師と行……………	秋山 範 二著……………(二)
日本精神研究……………	大川 周 明著……………(三)
生・道・教……………	小尾 範 治著……………(四)
勤勞に輝く青年團……………	大日本青年團本部編……………(五)
若きドイツは鍛へる……………	ヘルムート・シュテルレヒト著 日本青年外交協會譯……………(五)
祖國の爲めに戦ふドイツ青年……………	シュエルク著 小塚 新一郎譯……………(六)
戦時下の世界青少年運動……………	三島 通 陽著……………(七)
憂國遺言……………	田中 光 顯著……………(七)
ラヂオ時局讀本……………	日本放送協會編……………(八)
隨想 飛び石……………	大倉 邦 彦著……………(九)

日本士道……………竹内 尉著…(九)
 をしく立て……………綿貫哲雄著…(一〇)
 葉隠こゝに道あり……………大木陽堂著…(一一)
 物語……………大日本青年團本部編…(一二)
 名士談話室……………相馬御風著…(一三)
 先人を語る……………

政治・社會・經濟・兵事

物の經濟はどうなる……………岡崎文勳著…(一三)
 東亞經濟讀本……………中外商業經濟部編…(一三)
 新稅問答……………朝日新聞社編…(一四)
 大戰外交讀本 第二……………外務省情報部編…(一四)
 日本の外交……………伊藤述史著…(一五)
 日本近代外交史……………丸山國雄著…(一五)
 第二次歐洲戰爭と潜水艦戰……………阿部信夫著…(一六)
 近代海軍と海戰……………柴田賢一著…(一七)

機械化兵器讀本……………吉田豊彦著…(一八)

歴史・傳記・地誌

乃木將軍……………宿利重一著…(一九)
 藤田東湖……………蔭山秋穂著…(一九)
 水戸義公と烈公……………蔭山秋穂著…(二〇)
 賴山陽……………高島忠雄著…(二一)
 本居宣長……………石村貞吉著…(二二)
 大發明家の一生……………河村直著…(二三)
 興亞經濟地理……………佐藤弘著…(二三)
 大陸襍記……………熊谷辰治郎著…(二四)
 海の二千六百年史……………高須芳次郎著…(二四)
 二千六百年史抄……………菊池寛著…(二五)

科 學

海洋學讀本……………東京日日新聞社編…(二六)
 大阪毎日新聞社編…(二六)
 細菌物語……………永野爲武等譯…(二七)
 最新の自然科學……………原田三夫著…(二八)
 技術家評傳……………三枝博音著…(二九)
 杉田玄白の蘭學事始……………板澤武雄著…(三〇)

文 學

北 洋……………佐藤光貞著…(三一)
 支 那 海……………佐藤光貞著…(三一)
 善 人 村……………吉田絃二郎著…(三二)
 續建設戰記……………上田 廣著…(三三)
 百 姓 記……………吉田十四雄著…(三四)
 海軍爆擊隊……………北村小松著…(三五)
 おくのほそ道の記……………吉田絃二郎著…(三六)
 大地と共に生きる……………石川達三著…(三七)

りんふん戰話集……………上田 廣著…(三七)
 火の赤十字……………松坂忠則著…(三八)
 續分隊長の手記……………棟田 博著…(三九)
 庄 内 平 野……………丸山義二著…(四〇)

産 業

國家と農村……………小野武夫著…(四一)
 時局農村讀本……………中農俱樂部編…(四二)
 作物病虫害……………武内晴好著…(四三)
 果樹病虫害……………織田富士夫著…(四三)
 厩 肥……………瀧元清秀著…(四三)
 麻生慶次郎著…(四四)
 和牛の改良と登録……………羽部義孝著…(四五)
 最新和牛の飼方……………高橋正治著…(四五)
 緬羊飼育相談……………惣津律士著…(四五)
 兎の飼ひ方……………橋爪敬三郎著…(四六)

修養・處世

儒教と我が國の徳教

諸橋 轍 次 著

特小判 九〇頁 〇・三〇 目黒書店

著者は東京文理科大學教授、文學博士。この本は教學局主催で行はれた金澤醫科大學に於ける日本文化講義をその儘出版したもので、従つて見出しも少く段落もなく幾分讀み難い感はあるが内容は平易で、支那に起つた儒教が我國に消化されて行く經過がよく示されてゐる。

全體が二つに大別され、前半は「儒教とその思想的背景」となつてゐるが、こゝでは簡單ながら支那に於ける儒教の歴史と儒教の本質とがよくつくされてゐる。後半が「儒教と我國の徳教」と云ふ見出しで、支那に發生した儒教が日本に入り、日本古來の徳教とどんな風に融合して行つたか、言ひ換へれば我が國の徳教と如何なる關係に在つたかを述べてある。日本古來の風習に儒教が少しづつ融け込んで行く経路が色々の例を用ひて面白く、分りよく説かれてある。中華民國との政治的關係が今日の様な時代には、支那に起つた儒教が色々に批評され勝ちであるが、今日では儒教は決して支那だけの儒教でなく、古來の日本精神と立派に融合して日本獨特の儒教が成り立つてゐることを知つて頂き度い。

道元禪師と行

秋山 範 二 著

四六判 三〇一頁 一・八〇 山喜房

著者は彦根高等商業學校教授であるが、同時に道元禪師の研究家としても著名で、既に「道元の研究」の名著がある。「道元の研究」は相當専門的な研究書で誰でもが讀めると云ふ本ではなかつたが、それに較べると本書は遙に平易で一般性を持つてゐる。最初に「正法眼藏五夕談」と云ふのがあつたが、之は昨年の暮五日間に互つて京都から放送された「道元の正法眼藏」と云ふ講演で、禪師の有名な著「正法眼藏」を説くことに依つて禪師の思想、就中行の思想、座禪の意義を明かにしたものであつて、之などは甚だ平明で分りよい。その他この本には十數篇が收められてゐるが、それ等は總べてがすべて道元禪師に限られたものではないが主に坐禪を中心とした行の教を説いたものである。むづかしいと云へば稍々むづかしいと云ひ得るかも知れないがこの種のむづかしさは讀む者の心の中に求むるものがありさへすれば、容易に乗り超え得るむづかしさである。こゝで讀書論をするわけではないが、知識的な本は一定の基礎知識なしでは讀めない本があるが本書の様な精神的宗教的内容を主としたものは、こちらに讀まうと云ふ心構えさへ充分に出來て居れば、相當高級なもの迄讀みこなせるものである。骨を折つて一冊の本を讀み通した後の快感、この快感を本書に依つて味はれんことを希望する。

日本精神研究

大川 周 明 著

四六判 三三二頁 一・〇〇 明治書房

西洋の思想は分析的である。東洋の思想は綜合的である。この出發點の相違は、思考の方法の上にも、又表現の形式の上にも色々差異を生じ來り、その何れにも長所もあれば特徴も見出されるので、簡單にどちらが良いとか悪いとか云ひ切れることは出來ない。唯問題は西洋の思想だからと云つて直ちに新思想として取入れることの可否である。分析的に思考されたものは如何にも巧緻で、一見新説の如く思はれるが、往々にして綜合的な東洋思想の中に既に包含せられてゐることがある。序文によれば著者はその思想上の遍歴を、米國のエマソンから始めて獨逸の神秘主義、伊太利のダンテ、ダヴィンチ、和蘭のスピノザ、譯つて再び近代獨逸に歸つてヘーゲル、フイヒテと經過されたが、結局印度に歸り、薄伽梵歌(バカヴァットギター)の「假令劣機にてもあれ、自己の本然を盡すは、巧に他の本然に倣ふに優る。自己の本然に死するは善い、他の本然に倣ふは恐るべくある」と云ふ聖語に教へられて祖國日本に歸つて居る。然も祖國日本の本然が劣機どころか森嚴雄渾なるを知られて「予の全心身を日本其者の爲に献げねばならぬ」と斷言して本書執筆の序として居られる。

この本では明治維新の新思想家横井小楠、幕末の農政家佐藤信淵、心學者石田梅巖、勤王家平野國臣、劍の人宮本武藏、その他織田信長、上杉鷹山、上杉謙信、源頼朝等が研究され、之等の人々の中に現れた日本

精神が烈々たる氣迫を以て描き出されてゐる。殊には著者の熱情の迸つた筆致は、必ずや諸君を引きつけずにはおくまいと思はれる。敢て一讀をお薦めする次第である。

生・道・教

小尾 範 治 著

四六判 四八七頁 二・五〇 三友社

この本は著者が執筆された多くの小論説——主として人生問題に關するもの、教育、特に徳育に關するもの、そしてそれ等の時局との關聯性を説かれた約三十篇を収めたものである。著者をして云はしむれば「生を思ひて道を求め、道を求めて教へを尋ぬることは人生の常道(序)」でなければならぬ。そして著者自身勿論この常道を辿られたわけであるが、本書はこの常道を歩まれた、云はゞ記録とも云ふべきものである。最初に「人生の意義」と云ふ一章がある。この章に「人間にとつては人間それ自身があらゆる價値の根源である」と説かれてゐる。この意味をよく考へて欲しい。財があると云ふのも、地位があると云ふのも、或は又學識があると云ふのも畢竟それは附加物であつて、人間の價値を決定する根源ではない。人間それ自身があらゆる價値の根源である。處が又その人間それ自身が問題である。人間をたゞ個なる存在として考へることは出来ない。民族或は國家と云ふ全體的觀點の上に立つてこそその人間である。こゝに大きな問題がある。それ等のことがこの本には平易に扱はれてゐる。一見稍々高級難解の書のように思はれるが、内容は極めて平易である。然しどちらかと云へば一般青年諸君へよりは指導者階級の人々へのものである。

勤勞に輝く青年團

大日本青年團本部編

四六判 一五九頁 〇・五〇 日本青年館

宮崎縣の祖國振興隊を始め三重縣、廣島縣の紀元二千六百年記念青年勤勞報國運動、奈良縣橿原の建國奉仕隊等々、今日では全國殆ど各道府縣に青年團の勤勞奉仕運動が實施せられてゐる。云ふ迄もなくこの運動は青年團が愛郷愛國の赤誠を傾けて集團的に勤勞奉仕し、或は開墾に植林に、或は道路の開設、公共建築物の建設等に公共精神を實踐すると同時に、この勤勞を通じて日本精神を鍊磨し、共同一致の精神を培養し、以て躍進日本の建設に献身報國の誠を致すことを目的とするのである。本書ではこの運動の町村に於ける具體例を紹介したもので、廣島縣廣定村、三重縣壬生野村、同縣神戸村、廣島縣小奴可村、同縣山手村、靜岡縣大淵村、兵庫縣草山村、岩手縣船越村、埼玉縣田宮村、山口縣廣瀬村の十村青年團の事例が紹介されてゐる。この十例は何れも農業報國運動を主とするものではあるが、同じ農業報國運動でも色々の類型を示したもので、決して同種類の十例ではない。この種の運動に依つて青年團に對する村人の理解を高め、同時に青年團自身の充實、團員訓練の實を擧げ得たならばこんな結構なことではない。

若きドイツは鍛へる

ヘルムート・シュテルレヒト著
日本青年外交協會譯

四六判 二三五頁 一・五〇 日本青年外交協會

ポーランドをたちまちに撃ち退けたと思つたら、鋒先を直ちに西に轉じ、不落を誇つたマチノ線を突破

し、海を越えて英本土に爆弾の雨を浴せて居る。この驚く可き獨逸の勝利は一體何處に胚胎したものであらうか。われわれは本書を読むことに依つて成る程とうなづくことが出来る。日本に日本魂がある様に獨逸には獨逸魂がある。その獨逸魂を彼等は國防教育に集中して鍛錬し、健全な肉體と健全な精神と、之に加へて健全な技術とを獲得してゐる。初めに「新しい道」「ドイツ兵士の移り變はり」「新しいドイツ兵士の姿」「教育の本質」等の諸章がある。こゝで獨逸魂の本質が遺憾なく説明されてある。次の諸章「山野」「體育」「射撃」「兵士への道」「道」「青年募營」「アルバート・デーインスタ」「特別訓練」に於ては強い肉體と、勝れた技術獲得への途が細かに説明されてゐる。われわれは唯一貫された訓練の方法に一驚する。だが吾等は何も獨逸人のやつてゐることをその儘取り込む程あわてゝはいけない。日本には日本の道がある。然し少くとも本書を以て他山の石とすることには吝でない。本書は特に指導的立場に在る人々には是非一讀を薦める。

祖國の爲めに戦ふドイツ青年

シユルツェ 著
小塚 新一 郎 譯
菊判 三五頁 〇・二五 日本青年館

前掲「若きドイツは鍛へる」を主として指導者諸君へ薦めて見たが、同じ様な内容を持つ本書を一般青年諸君にお薦めする。著者は駐日ヒットラー・ユーゲント代表として諸君には既にお馴染みのラインホルト・シユルツェ氏、簡單ではあるが最も新らしい資料を以て、戦時下獨逸青年の組織と活動とを友邦日本の青年諸君に告げんとするものである。以て他山の石とせられ度い。

戦時下の世界青少年運動

三島 通 陽 著
四六判 三〇二頁 一・八〇 日本評論社

一國の運命がその國の次代の責任者である青少年に如何に多くを負ふてゐるか、盟邦ドイツに於ける、或はイタリーに於ける最近の事情が雄辯に之を物語つてゐる。又世界の各國が青少年團運動に躍起となつてゐる理由も自らこゝに存すると思ふ。

この本は著者が昭和十三年日伊親善の青少年代表部隊を引率して歐洲へ使せられた折の記録で、ドイツ、イタリー、英國、フランス、ベルギー、オランダ、ポーランド、アメリカ等の歐米諸國は固より、タイ國、滿洲國に迄互つての青少年團の世界的縮圖である。何分三百餘頁の小さな本に世界主要國が收められてゐるので、それ程立入つて青少年團の事情は述べ得ないのは當然で、寧ろ本書の特色は、簡單ではあるが全世界の青少年運動を一冊の小さな本の中に鳥瞰し得る所に在る。然もその鳥瞰たるや、既に發表された圖書や資料に依つて得た二番煎じではなく、著者の親しく見且つ聞かれた記録である所に本書の價値がある。

憂國遺言

田中 光 顯 著
四六判 四三〇頁 一・八〇 鱒書房

「玉の緒のつどくかぎりはすめらぎの御國のためにつくさざらめや」とは光顯翁九十七歳の詠であるが、こ

れは天保十四年に生れ、孝明天皇の御代より明治大正昭和と四朝に歴仕し、昨年九十七歳の高齡を以て薨せられた翁の生涯を通じての指導原理であつたやうと思はれる。まことに草莽に身を起し、尊皇護國に全生涯を終へられた翁には、身魂憂國の至誠以外には何者もなかつたのである。本書はこの憂國の志士が晩年折に觸れて語られた言葉を側近者の筆録したもので、市井の一話題に寓して時世を説かれたものもあり、政談もあり、風流文事を談ぜられたものもありと云ふ風に内容は各方面にわたつてゐるが、その間には維新時代の志士としての翁の颯々たる姿も偲ばれる。談話の筆記であるから行文極めて平易で面白く讀めるものであるが、その中に幾度か死生の間を彷彿ひ、白刃の下をくぐり抜けられた翁の氣迫がおのづと沸き上つて、讀むものゝ襟を正さしむるものがある。

ラヂオ時局讀本

日本放送協會編

特小判 二二三頁 〇・五〇 日本放送協會

毎週一二回、夜の八時半から「ラヂオ時局讀本」が放送されるようになってから既に二年餘になる。この時間には内閣情報部からの資料に依つて編纂された政治、經濟、外交、軍事その他戰時下國民の知つておかなければならない時局に關する知識を平明に解説され一般からも好評であつたが、今回その中から比較的新らしいもの二十篇を一冊の本に纏めて出版された。既に一度は諸君の耳に入つたことではあらうが、更に之を眼に訴へることに依つてその効果が一層強調されることと思ふ。記述は平易であるし、資料は正確であるし、國民の時局認識の涵養には誠に適合したものであると思はれる。

隨想 飛び石

大倉 邦彦 著

四六判 三七〇頁 一・六〇 青年書房

著者の語録である。著者は現在東洋大學の學長として青年學徒の教育に當つて居らるゝが、一方早くより大倉精神文化研究所を主宰して國民精神の本質把握に力めて居らるゝことは諸君も既に御承知の通りである。その著者が折にふれて感じたこと、考へついたことを書き記してこの一書を作り成されたので、著者の言葉に従へば、つまり「思想の飛び石」である。二行三行の短かいものが多く、長くとも一頁を出づるものは少い。この思想の飛び石を傳つて歩き、その思想を敷衍することによつて、著者の思想が如何様にも發展して行くのではないかと思はれる。内容は修養、宗教、教育、學問、政治等の諸面に觸れたものであるが、天皇を中心とし奉つた皇國日本主義がこの著者の中心思想であることははつきりしてゐる。

日本 士道

竹内 尉 著

四六判 三三四頁 二・〇〇 健文社

武士道と云ふ言葉は從來兎角狭く解釋され勝ちであつたが、武士道の本來の姿は決して封建時代の武士階級にだけ存した特別なものではない。殊に武士も町人もない今日の日本に於ては、武士道はもつと廣く我々

の生活に喰ひ入つて、「日本人の道」とか「日本人の徳性」とか云ふ風に考へてよいと思ふ。そう考へることに依つて始めて「武士道」の現代的意義が生ずるのである。本書の著者も無論「日本士道」を廣義に解して單なる勇武の道とはして居ない。

内容は最初に「日本士道」と云ふ見出しで書かれてゐるが、こゝでは日本人の民族的性格から日本士道の特質を抽出してゐる。著者は弓道の専門家であるらしく、日本士道を説くに當つて、弓を射る時の「射」の精神を日本人徳性表現の一形式として居られるのは仲々面白い。次は「海洋民族としての日本人」と云ふ一項であるが、勿論こゝで扱はれてゐることは日本民族の海洋的性格である。次は「士道と文化」で日本文化と日本士道との關係であることは云ふ迄もない。そして最後に武士道を體系づけた第一人者としての山鹿素行、之に結論を與へたと思はれる吉田松陰の兩先生を取りあげて居る。記述は平易で読み易い。

を、しく立て

綿貫哲雄 著

四六判 一六六頁 〇・六〇 日本青年館

この本は座右に置いて愛誦するに適する。田に畑に、疲れた身體を草の上に仰臥し、所きらはず讀むに適する。労働を喜び、わが風土を愛し、國柄を尊んで「を、しく立つ」の道を示す本書の内容は豊かで、記述は詩の様である。徒に悲憤せず慷慨せず、靜かに反省の機を與へ、喜びを味はしむる本書は、正に諸君の爲には慰めの書であり勵ましの書である。著者は諸君を呼んで「黙々として勞役に堪へ、職場を守り、日夜生業に勵んでゐる男女青年諸君」と云つて居る。斯くてこそ本當に次代を荷ひ得る青年諸君である。尙本書は本團に於て曩に著者監修の下に編纂刊行した教本の中から適當な所を選び出して新しい形にまとめられたものであることを附言しておく。

葉隠物語 こゝに道あり

大木陽堂 著

特小判 九五頁 〇・三五 日本青年館

名士談話室

大日本青年團本部編

特小判 一〇六頁 〇・三五 日本青年館

先人を語る

相馬御風 著

特小判 八九頁 〇・三五 日本青年館

以上三冊何れも本團に於て令旨奉戴二十周年を記念して刊行した青少年文庫の中のものである。「こゝに道あり」は鍋島論語と呼ばれてゐる「葉隠集」の中から幾つかの話を抜き出したもので、「葉隠集」と云ふのは肥前鍋島藩の歴代の藩主及び藩臣の事績を録したもので、武士道の眞髓に觸れたものばかりである。これが大木陽堂先生の筆で平易な現代文に書き改められてある。「名士談話室」は三島章道、小笠原長生、永井柳太郎、永田秀次郎、本田靜六、藤原咲平と云ふ様な政界學界思想界の名士二十七氏の感想を集めたものである。最後の「先人を語る」は勤王の歌人井手曙暨とか明治佛敎復興の傑僧雲照律師とか巖山禪師とか、或は

能樂の寶生九郎とか俳聖芭蕉とか云ふわれ／＼の先人として仰ぐことの出来る人々に關する逸話の類が集められてある。何れも三十分位で読み切つて了へる肩のこらない讀物である。

政治・社會・經濟・兵事

物の經濟はどうなる

岡崎文勳 著

四六判 一五五頁 〇・三五 朝日新聞社

聖戰こゝに三年、我國朝野は一路新東亞建設に邁進しつゝある現状であるが、その基礎工作たる經濟建設と云ふことが、如何に國民一人一人の協力を必要とするかは、昨今の我々の日常生活を振り返ることに依つて容易に首肯出来ようと思ふ。我々には戰時經濟の樞軸としての物の經濟を正しく認識し、國策の遂行に協力すると云ふ國民として重大な責任が負はされてゐることを知らなければならぬ。この目的の爲に諸君にこの本をお薦めし度い。

本書は百五十頁の小冊子であるが、その中に物資動員計畫、生産力擴充計畫、圓ブロック經濟、中南支南洋の資源、東亞一體の經濟提携等の概要が解説され、統制の必然性を論證し、計畫の合理性が批判され、結局國民全般の積極的協力が結論されてゐる。論旨明快で且平易、著者が商工省物資調整官と云ふ専門家である所から資料が誠に正確で豊富であると云ふ點からも何等の不安なしに諸君に推すことの出来る良書である。尙本書は文部省推薦圖書ともなつてゐる。

東亞經濟讀本

中外商業經濟部編

菊判 三〇一頁 一・八〇 千倉書房

戰時經濟の全般に互つて現状を説明し、將來の動きについて解説したものである。内容の主な項目を列記して見ると、物資總動員と物價、財政（戰時豫算と税制改革）、金融、國際收支（對外貿易）、農業、動力及び交通、大陸經濟、重工業、纖維工業、化學工業等となつて居る。一冊の本にこれだけの内容を盛つたものである爲、従つて記述も解説的で一應の知識を與ふるに止まり、各々の問題について深い検討が加へられたものではない。別段むつかしいものではないが、所謂讀み物と云ふよりは參考書的なものである。故に指導者などが青年指導上、この方面の知識を必要とした時などには大いに役に立つものである。

新 税 問 答

朝日新聞社編

四六判 五一七頁 一・七〇 朝日新聞社

今年度から實施せられてゐる新税法は、その目的、内容の上からわが税制上劃期的なものであつて、國民生活の上にも、事業經營の上にも關係する所極めて深く、従つて國民は誰でもこの税法の内容と主旨とをよく理解してゐなければならぬ。この新税に關する解説書は最近相當多く出版されて居るが、その中から特

に本書を取り出して諸君に薦めて見度い。本書は曩に朝日新聞に連載された「新税を當局に聴く」を纏めて一冊の本としたもので、この種の本としては動もすれば無味乾燥に、又むづかしく述べられ勝ちになる所を、平易な問答式にした處に特徴がある。それかと云つて問答式記述の陥り易い断片的な云ひ方、論理性の缺如と云ふ點も誠によく注意して避けてある。又この問答式記述に参加された方々はすべて専門家であつて、内容に對する信頼性は申分ない。以上の様な理由を以て數多い類書の中から特に本書を諸君にお薦めする次第である。

大戦外交讀本 第二

外務省情報部編

四六判 二〇八頁 〇・八〇 博文館

この讀本の第一は前輯に掲載されてあるが、この第二は直ちに之に續くものである。第一ではヴェルサイユ條約から第二次歐洲大戦勃發迄の経過が述べられてあつたが、第二ではソ聯と芬蘭との開戦から獨逸の和蘭、白耳義進撃までが收められてある。前輯同様外務省情報部の編纂になるもので、正確な資料に依る大戦外交解説書として青年諸君には誠に手頃なものである。

日本の外交

伊藤述史著

四六判 一四二頁 一・〇〇 三省堂

外交の獨自性、或は自主性と云ふことは今日迄も屢々叫ばれ來つた處であるが、目下の世界情勢並に國內情勢は之を單なる懸け聲として放置しておくことは到抵許されない。諸君は日々の新聞の報導に依つて、現下の逼迫せる世界情勢に對處すべき帝國外交の任務の如何に重大であるかは既に御承知のことと思ふ。我々はこの秋に當り帝國外交の本質を明確に把握することの必要を痛感して本書を取り上げて見た。そして諸君に誠に好適の書であることを知つてお薦めする次第である。

著者は新らしく擴充された内閣情報局の初代長官で、多年外交場裡に活躍され、今事變に際しても支那に歐洲に重大使命を帯びて使ひせられたことは今更云ふ迄もない。内容は、「國策を世界に實現すること」と云ふ外交の本質を簡潔平易に解説したものであつて、我々は本書に依つて外交の非公開性を知ることとも出來れば、又國防との關係、經濟との關係も教へられるのである。殊に國策を世界に實現することが外交の本質であつて見れば、その國策に獨自性のある我國に於ては、そこに自主獨立の存することは自明の理である。この點に關しても著者は肇國の大精神に則つて明快に帝國外交の本質を述べてゐる。記述は平易で誠に讀み易い。

日本近代外交史

丸山國雄著

新四六判 二八四頁 〇・九五 三笠書房

前に掲げた伊藤述史氏の「日本の外交」が専ら外交の本質を取扱つたのに對して、本書は外交の實際を記述したものである。云ふ迄もなく日本の外交が正式に始つたのは明治維新以後のことであつて、本書で扱は

れてゐるのも明治政府の成立からである。例へば諸君は硫球は最初から日本の硫球であるかの様に考へて居るかも知れないが、明治政府が清國の抗議を却けて硫球處屬の問題を解決する迄には幾多の外交的折衝を重ねてゐることを忘れてはならない。その後朝鮮問題を中心に日清戦争への發展、三國干渉及び條約改正、日英同盟の成立、日露役を前後にしての日露關係と云ふ様に我が外交界は極めて多事であつたが、いつも御稜威に依つて國威を海外に輝かせ來つたことは諸君の知らるゝ通りである。本書ではこの間の發展經過が簡潔に正確に、然も讀み易く描き出されてゐる。年代的には、明治天皇の御親政遊ばされた明治時代迄を近代とし、従つて外交上の問題としては明治四十三年八月二十九日の日韓併合に終つてゐる。今日外交問題の重要な折柄、過去の歴史を正確に把握して國家の向ふべき方向を知ると云ふことは極めて肝要なことである。この本を伊藤述史氏の著述と共に諸君に薦める所以も自ら其處に存すのである。因に著者は維新史料編纂官で、本書は文部省の推薦圖書ともなつてゐる。

第二次歐洲戦争と潜水艦戦

阿部 信夫 著

四六判 三〇二頁 二・八〇 海軍研究社

過ぐる上海事變の時も、今次の日支事變に際しても、我海軍では潜水艦の活躍する機會は全然與へられず二十年來潜水艦勤務をされたと云ふ著者の言葉を藉る迄もなく、定めし潜水艦隊の勇士達は脾肉の歎を啣たるゝことと思ふ。勿論之は相手方支那海軍の劣勢による結果で、第一次第二次の歐洲大戦を通じて見ても分るように、空の荒鷲と共に海の花形は何と云つても潜水艦であることに間違ひはない。だがこの潜水艦の海戦に於ける實力はどの程度であるのか、之を過少視することは許されないが、さりとして之を過大視することも危険である。海軍全勢力に於ける潜水艦の位置を正しく認識すること、之が最も望ましいことであるのは云ふ迄もない。著者は海軍軍事普及事業に關與せらるゝ所から最もこの點を憂へて本書を執筆されてゐる。内容は潜水艦の科學的常識から始めて、その性能、潜水艦隊發達の歴史、今次歐洲大戦に於ける潜水艦を中心としての海上作戦、戦法等が平易に扱はれてゐる。唯著者の序文にもある通り帝國海軍の潜水艦の内容については一切言及して居られないことは當然なことである。

近代海軍と海戦

柴田 賢一 著

四六判 三二二頁 一・〇〇 博文館

前掲阿部信夫中佐の「第二次歐洲戦争と潜水艦戦」は書名の示す通り潜水艦だけに就いて詳細に説明された誠に興味の深い本であつたが、こゝに掲げた「近代海軍と海戦」は海軍力全般に關して述べられたもので、一般國民に海軍と海戦の實際を知らしむる大衆的兵書である。

最初に今次歐洲大戦勃發時に於ける獨伊對英佛の海軍力が比較され、總力に於て劣勢な獨逸がどんな風にして英國に對して行くであらうかと云ふ様なことが取扱はれてゐるが、記述が簡單で餘り深味はないがジャナリスティックな興味のためについ引きつられて讀んで行く。次に第一次大戦の主な海戦を解説し、之に

關聯して飛行機、潜水艦の發達した今日の海戦がどうあるべきかが説明され、以下は現代の軍艦の艦種、兵器の簡単な解説になつてゐる。海軍軍事思想普及の目的の爲には誠に適した本である。

機械化兵器讀本

吉田 豊彦 著

菊判 二七八頁 一・三〇 東京日日新聞社

近代戦の特質は全面的には國家總力戦であること、技術的には強固なる精神力の集中と優秀なる機械化部隊の建設であることは諸君の既に知らるゝ通りである。その爲に軍の機械化と云ふことは最近世界各國に於ける一般國民の重要關心事で、各國その充實に相競ふて居るのが現状である。この本はこの現状に鑑みて、國民一般に機械化の概念を得させる爲に執筆されたもので、著者は機械化國防協會長で陸軍大將。内容は「發動機化」即ち戦車とか装甲自動車とかに限られてゐるが、それだけでも機械化の意義を明かにするには充分である。唯戦車類の内容の構造の説明の少いこと、日本の現状についての記述の少いこと等は、いさゝか物足りなく感じないではないが、軍の機密に屬することであらうから之は致し方あるまい。曩に推薦した青木保著「兵器讀本」(本目錄第十七輯所載)と併せ讀まれれば近代兵器或は機械化の大體に通ずることが出來ようと思はれる。

歴史・傳記・地誌

乃木 將軍

宿利 重一 著

四六判 一七〇頁 〇・六〇 三教書院

著者の自序に世界に於ける偉人の傳記中米國のリンカーンとわが乃木將軍のものが最も多いと述べられてゐる。實に乃木將軍は國民敬慕的であるが故に、その傳記の多いことは當然のことであるが、今又こゝに優れた乃木將軍傳を加へたことを我々は心から喜ばざるを得ない。著者は年少の頃より乃木將軍の親戚に寄寓し、將軍にも亦靜子夫人にも近接せられた。従て本書は世の常の乃木將軍傳と異り、乃木精神を傳へて餘すところがない。本書は主として將軍の少年時代、青年時代に最も重點が置かれてゐる。然もその資料が巷間に流布されてゐるものと異り、比較的我々の知らない方面の事實が多く収録されてゐる。實に得難い一書である。

藤田 東湖

蔭山 秋穂 著

四六判 一三五頁 〇・六〇 三教書院

藤田東湖は水戸藩主烈公を扶けて藩の政治を改革し、尊皇攘夷の指導者となり、天下の志士を動かした幕末水戸藩の大人物である。西郷南洲の言葉に「吾れ先輩に於ては藤田東湖に服し、後輩に於ては橋本景岳を推す」とある。英雄よく英雄を知る。以て東湖の偉大さを知ることが出来る。東湖は實に烈公の懐刀であつた。公の勤皇は東湖によるところ極めて大なるものがあつた。東湖は水戸藩の重臣であり、京洛に活躍した

勤皇志士ではなかつた。又その壽を完うせず安政の震災に不慮の死を遂げた。彼はそのために比較的知られることが少い。しかし彼の偉大な性格は彼と交つた勤皇志士の齊しく述べるところである。又その「正氣歌」は青年諸君の愛誦せらるゝところであらう。

水戸義公と烈公

蔭山秋穂 著

四六判 一七三頁 〇・六〇 三教書院

水戸義公とは即ち徳川光圀公のことである。兒童にも親しまれてゐるのは光圀公の人格の偉大さを如實に示すものであり、助さん、格さんをお伴にした光圀諸國漫遊はよしんば後人の創作であるにしても公の偉大な性格を傳へる一つの資料である。然し公の功績は「大日本史」の編纂を以て第一とする。「大日本史」が日本臣民の據るべきところ、尊皇愛國の大義を示したものであることは云ふまでもないことである。又公が楠公の誠忠を顯彰してその碑を湊川に建立したのは公の尊皇精神を如實に示すものである。更に公が水戸藩の庶民のために垂れた愛護の數々、その善政は多くの逸話によつて覗ひ知られる。本書はこの不出の名君の面影を傳へて餘すところがない。

水戸烈公とは安政の大獄で名高い水戸齊昭公である。公の事業はすべて義公の遺志を昭述したものである。幕府の親藩であり乍ら幾多の志士を輩出したのは公の尊皇の精神に基くものであり、井伊大老の通商條約締結に對しては朝廷より公に對し攘夷の密勅が下されたのである。公が又善政を藩内に施かれたことは義公にいさゝかも劣るものではなかつた。

本書はこの水戸藩の二名君を傳してその尊皇の精神を明らかにした點で青年諸君の座右に備へたい一卷である。

頼山陽

高島忠雄 著

四六判 一八三頁 〇・六〇 三教書院

山陽は最も青年に親しみの深い學者である。「日本外史」を知らざる青年はなく、又「雲耶山耶」の「天草洋に泊する」の詩を吟じたことのない青年は恐らくあるまい。彼は卓越した史眼を有した歴史家であつたと同時に尊皇の志を抱いた愛國者であつた。殊に彼がその病弱の身を以て二十數年間の心血を注いで「日本外史」を完成した努力は我々をして深く感動させるものがある。本書は彼の生涯を創作風の筆致を以て傳へたものである。かゝる小冊子を以て山陽の全貌を傳へたのは本書の大なる功績であると云はぬばならぬ。

本居宣長

石村貞吉 著

四六判 一六一頁 〇・六〇 三教書院

伊勢松坂の旅宿新上屋に於て一夜三十四歳の本居宣長が六十七歳の賀茂眞淵に會見して師弟の契を交はしたことは人口に膾炙してゐる物語である。宣長畢生の大事業たる「古事記傳」に着手することを決意したの

はこの時であつた。その後眞淵の死に至る迄六年間この二人は互に文通して、或は示教を仰ぎ、又指示を蒙ること度々であつたが、その會見は實にこの一回に過ぎなかつた。しかも國學の傳統は完全に授受されたのである。眞淵の功績の大きさはもとよりの事ながら、師の精神を繼承して國學を大成した宣長の偉大さは不朽のものである。宣長は直接は直接勤皇運動に參劃した人ではなかつた。然し國學によつて、中世以來儒教や佛教の拘束を受けて來たわが思想を解放し、上代の文獻を通じて神ながらの道に従ふ我國の古道の姿を究めて日本精神の眞髓を傳へた宣長の功績は實に大きなものである。本書は風雲漸く急なりし當時の情勢を述べ、國學の勃興を説き、宣長の生涯を傳へ、その思想を述べたものである。

大發明家の一生

河村直著

四六判 三二六頁 二・〇〇 婦女界社

「大發明家の一生」とは日本の生んだ世界的汽鐘の發明者田熊常吉氏の不屈不倒の精神を傳へ、その偉大な功績を述べたものである。昭和三年秋、昭和御登極の大典に際し、氏は發明界として空前の榮譽を擔ひ、風教殖産興業の功により勳五等に敍せられた。翌四年長くも 天皇陛下神戸行幸の際には特に兵庫縣廳にめされ拜謁仰せつけられた。これが四十歳まで一介の材木商であり、機械學のイロハをも知らなかつた人物の完成した發明に與へられた光輝ある榮譽の數々である。今やタクマ式汽鐘の名を知らぬ者はあるまい。左に各大學機械學の諸教授より同氏に贈られた胸像贈呈狀の一節を引用しよう。

「田熊常吉君生死ノ間ニ彷徨シテ惑ハス遂ニ前人未到ノ裝置ヲ案出シテ特異ノ汽鐘ヲ完成ス循環整然蒸發迅速効率世界ニ冠タリ天子之ヲ嘉賞シテ高勳ヲ賜ヒ更ニ十大發明家ノ班ニ列シテ宮廷ノ殊遇ニ浴セシメラル光榮匹儔ニ値スルモノ罕ナリ君齡既ニ耳順ヲ越エテ研鑽尙倦マス頃者自カラ研究所ヲ起シテ益々汽鐘報國ニ精進セントス」

本書ハ所謂傳記小説である。波瀾に富んだこの大發明家の不屈の意志力が巧みな筆致で書かれてゐる。あらゆる困苦を乗り越え、他人の罵倒に陰忍して發明に精進した田熊翁の傳記は必ずや青年諸君に示唆するもの多きことを信ずる。

興亞經濟地理

佐藤弘著

新四六判 二〇七頁 〇・五〇 日本放送出版協會

佐藤弘氏は東京商科大学教授で、經濟地理學の權威である。本書は嘗て東京中央放送局より放送された講演原稿に加筆されたもので、時局下最も注目すべき東亞共榮圈の内、日本外地、滿洲、支那の經濟地理を述べ、著者の常に提唱する日滿支經濟ブロックの必然の發展性と東亞經濟建設の基本的目標を論じたものである。その孰れもが未開發の豊富な資源を藏してゐることは夙に論じられるところであるが、單に抽象的に漠然として之を記憶するより、一步を進めて具體的に各地域に互り、その産業、經濟資源、更に文化一般に就いて、知識を得てをくことは時局下の青年層にとつて必要と信ずる。その點で本書は最も手頃のものである。

大陸襍記

熊谷辰治郎 著

四六判 一七八頁 ○・七〇 日本青年館

青年諸君にとつて最も親しみの深い熊谷總務部長が一昨年秋も漸く深からんとする時、田子一民氏と共に戦雲の支那大陸へと旅立ち、朝鮮、滿洲を経て、北支中支を巡歴し、戦火の現地や占領地域を親しく見、又皇軍の勇士に感謝の意を表して來られたが、本書はその間に於ける見聞を綴り、感想を述べられたものである。既に青年諸君は「青年」誌上に於て屢々その文章に接してをられることであらうが、本書またいつに變らぬ暢達の文章である。著者が支那大陸へ行かれた當時は尙ほ治安が必ずしも萬全の時ではなかつた。例へば天津の如きは第一次天津事件の後間もない時で戒嚴令が布かれてゐた。又山西方面の如きも匪賊の鐵道襲撃が傳へられてゐた。殊に漢口は攻略直後の戦跡もなま／＼しい時であつた。著者の體験はかゝる意味で實に貴重なるものである。尙ほ紀行の外に「戦跡一巡雑感」があり、治安工作と資源開發、指導者の養成等について著者の一家言が掲げられてをり、更に東亞の青年が相提携し、新東亞建設に邁進すべきことを提唱した「興亞青年聯盟を語る」が添えられてゐる。

海の二千六百年史

高須芳次郎 著

四六判 三二〇頁 一・五〇 海軍研究社

四邊環海のわが帝國の歴史が常に海と密接なる關係にある事は云ふまでもない。眼を閉ぢて二千六百年の歴史を形作る重なる事件を思ひ浮べて見るならば、如何にわが國民が海に活躍したかを直ちに知ることが出来るであらう。水戸學の權威高須梅溪博士が極めて平易に海を通してみた二千六百年のわが光輝ある歴史を要約して書かれたものが本書である。思ふに肇國の大業はまづ神武天皇の日向御進發を以て始まる。舟師は美々津港を船出して海路を瀬戸内海に入り、紀州に達せられたではないか。朝鮮半島、支那大陸との交渉には海路の危険を顧みず幾度も使者が往來した。元寇には元の海軍は脆くもわが一撃に潰え去つた。更に室町時代に於ける八幡船の活躍があり、下つて南洋日本人町の建設は如何にわが國民が進取的であり、海を舞臺としたかを知ることが出来る。徳川時代の鎖國は一時わが國民の海に據る活躍を阻止したかの感がある。しかしかゝる不自然なる政策が長く繼續すべき筈がない。幕府も海軍を作つた。明治時代に入つて海帝國の眞價は遺憾なく發揮された。東洋の盟主として世界を三分するわが國の海の二千六百年史は我々に貴い先人の偉業を示すものである。

二千六百年史抄

菊池寛 著

四六判 一二八頁 ○・三五 同盟通信社

皇紀二千六百年を記念するわが二千六百年史は既に數多く著作され、弘く推稱すべきものもあるが、本書の如く簡にして、滋味溢るゝ史眼を通して書かれたものは唯一であらうと思ふ。本書は既に「週報」に連載されたものであるから青年諸君の大部分は一讀されたことゝ信ずる、菊池寛氏の數多い著書の中で本書は最も

心血を注いで書かれたものであらう。歴史物語は氏の最も得意とするところであり、本書に對する氏の自信は充分視ひ知ることが出来る。極めて廉價であり、携帯も容易であるから、是非一讀を薦めたい。既に一讀された諸君も繰返し通讀されるのがよいと信ずる。

科 學

海洋學讀本

東京日日新聞社編
大阪毎日新聞社編
菊判 二五三頁 二・〇〇 東京日日新聞社

この本を「科學」と云ふ部門に入れることに就いては大いに異論がある。さりとして本書をこの目錄のどの部門に入れてよいか一寸判断に迷ふ本である。元來この本は昨年東京で東日大毎兩社主催で行はれた「海洋夏期大學」の講演速記に、講師自ら加筆訂正されたもので、内容は左の十一項である。

- 一、海權の消長と國家の盛衰
海軍少將 阿部嘉輔
- 二、海洋と航空
海軍中佐 小田原俊彦
- 三、海洋氣象
東京高等商船學校教授 大羽眞治
- 四、我國の遠洋漁業
水産講習所教授 田中耕之助
- 五、海洋學一般
水産試験所技師 丸川久俊

- 六、船舶と貿易
東京高等商船學校教授 井關貢
- 七、外南洋の情勢と邦人の活動
拓務省南洋課長 川本邦雄
- 八、航海と測量
海軍少將 小池四郎
- 九、海洋文學
早大教授 吉江喬松
- 十、北氷洋とソ聯
東京日日新聞社 黒田乙吉
- 十一、列國海軍々備の現状
海軍中佐 松島慶三

以上の内容目次に依つてもお分りの様に、本書は自然科學の一分野としての海洋學の解説書ではなく、海洋に關する凡ゆる方面が平易に説明された、云はゞ一種の海洋讀本である。南進、南進と云ふのが一つの合言葉の様になつて居る今日、海洋國民としての基礎知識を與ふるための良書として、青年諸君の必讀書の中に加へたい。因に本書は文部省からも推薦されてゐる。

細菌物語

メ 永野 爲 著
イ 谷田 專 武 治 譯
四六判 三六二頁 一・四〇 青木書店

我々は日常何の氣もつかず生活して居るが、専門學者の眼から見れば、人間はまるで細菌の中に、否細菌と一緒に生活してゐる様なものである。先づ下水を見給へ、塵埃箱を見給へ。いや、そんな汚い所は止めても飲料水の中に、ミルクの中に、それ所か我々の生存に缺くことの出来ない空氣の中に迄細菌は無數に存在し

てゐる。だからと云つて徒に細菌恐怖症に陥る必要はない。それ等の細菌が全部が全部人類の敵と云ふわけではないので、酒や醬油の醸造は固より、チーズの様な乳製品も細菌なしでは出来難い。

本書は人類生活と極めて密接な關係にあるこの細菌について、極く分り易く書かれた通俗科學書である。われわれは本書に依つて、眼に見えない微生物が如何に人類生活と深い關係にあるか、それが色々の病原となつて人類生命の破壊者たると共に、他面或る種の細菌が如何に人間生活を可能ならしめてゐるかを知らることが出来る。それと同時にこの細菌と取組んで學者達がどの様に奮闘して悪疫豫防のためにつくして来たかも知へられる。翻譯書である爲幾分讀み難い箇所もあるが、この方面の豫備知識が全然無くても讀めるものがある。

最新の自然科學

原 田 三 夫 著

四六判 三四〇頁 二・〇〇 ダイヤモンド社

近頃科學の普及化と云ふことは重大な問題になつて居る。何か必要なことが生じてから、その必要を満たそうとして急に發明發見を志しても、そう簡單にはゆかないものである。不斷の努力、幾多の貴い無駄を経た、初めて偉大な發明發見が生れるのである。であるから平生から科學常識を養つてその中に生活すると云ふことが最も望ましいことである。近頃叫ばれる科學の普及化と云ふことも必竟はそこに意味があるものと思ふ。所で科學の普及化にも二つの方法が従來行はれてゐる、その一つは、諸君の知らない色々な科學上の面白い知識を平易に説明して科學と云ふものに興味を持たせる方法である。然し私はこれを探らない。と云ふのは、これでは唯斷片的な科學上の話題を豊富にするだけで、決して讀む者の科學精神に觸れては來ない。科學の普及化の最も必要なことは「科學する心」を教ふることである。そこで第二の方法が考へられる。それは一つの科學上の發見、或は研究がなされた時、學者がその發見なり研究なりを如何なる動機から、どう云ふ苦心をして完成したかを系統的に平易に述べることである。その意味で私は科學者の傳記と、平易に書かれた系統的な科學書とが科學の普及化には最も必要と思はれる。こゝに掲げた「最新の自然科學」はその後に屬するもので、最近の科學界の問題になつてゐる事柄を、體系をよく立て、平易に書いてある。試みに近頃よく聞く「宇宙線」の處を開いて見ると、先づ宇宙線の何者なるかの定義が下してある。次に發見の端緒から道程が記してある。それから宇宙線の性質について細かく項目を分つて説明してある。その間に研究學者の名前もボツ／＼現れて來る。先づこの程度で一應良いのではないかと思ふ。本當に最近の科學界を理解するには高度の數學の知識を必要とするので、本書の様な小さな本で扱ひ得るものではない。科學の普及化の役を一應果す爲のものとしては本書の如きは方に恰好なものと云ふことが出来る。

技術家評傳

三 枝 博 音 著

四六判 二七六頁 一・五〇 科學主義工業社

題して「技術家評傳」と云ふが、技術家と云ふ言葉か或は諸君には熟して居ないかも知れない。が云ふ所

の技術者とは勿論單なる研究室内の科學者ではなく、又單に技術だけで立つた自らの中に科學的獨創性のない工人ではない。科學的獨創性と、之を機械その他の工具に應用し得る技術とを兼ね具へた人達である。その意味で本書には十七世紀の伊太利の發明家ドニ・パバン、ワットの蒸氣機關發明の先驅をなした英國のトマス・サヴァリ、トマス・ニューコメン、それからジェームズ・ワット、ジョージ・ステイヴンソン等、次は獨逸十八世紀の技術者ライヘンバツハ、鋼鐵王クルツ、十九世紀の大技術家ジーマクス、その間には熔鋼爐で有名な英國のベッセマも入れてある。日本では平賀源内、伊能忠敬、田中久重、石河正龍、大島高任、江川太郎左衛門等のこの道の大先達が擧げられてゐる。傳記と云つても技術を中心にした傳記で、この本は見かけよりも遙に高級なものであるが、諸君の中には本書の如きに依つて宜しく先人の事績を偲び、技術家としてスタートをする人が何人かあつてよいと思ふ。時代は優れたる技術家を要求してゐる。

杉田玄白の蘭學事始

板澤 武雄 著

小型本 一九八頁 〇・五〇 日本放送出版協會

昨年の夏著者が東京中央放送局から六回に亙つて連續講演されたものである。「蘭學事始」と云ふのは諸君の中には或は既に御存知の方もあらうかと思ふが、今から百二十五年前の文化十二年に、蘭學者杉田玄白が門人の大槻玄澤に書き與へた本である。この本の内容は我國に於ける蘭學の創始の由來を記したもので、當時蘭學と云へば醫學を中心にして本草學(今日の藥學に類するもの)、天文學、曆學、西洋流の兵學等今日我々の云ふ自然科學一般である。故にこの蘭學事始の内容を知るとは、我國の自然科學の發達の歴史を知ることになるのである。本書は著者が玄白のこの名著を色々の資料に依つて懇切丁寧に解説したもので、本書を通讀すれば日本の科學史の全貌を容易に窺ふことが出来る。ラヂオの講演であるから、言葉遣ひその他記述が一般に平易で、誠に良書と云ふことが出来る。

尙本書には附録として「日本民族の海外發展史」と云ふのが附してあるが、之もラヂオの講演で平易なものである。

文 學

北 洋

佐藤 光貞 著

四六判 二七四頁 一・〇〇 六藝社

本書は北洋にをける我が漁業の實況を傳へ、漁船保護のために出動してゐる驅逐艦乗組員の生活を描いたものである。最近に於てこそ我が南進政策が唱へられつゝあるけれども、わが北洋の漁業が終始わが國にとつて貴い資源を提供してゐることは云ふまでもないことである。然し宿命的にわが國と相對峙する運命に置かれてゐるやうなソ聯は、兎角わが漁業を圓滑に進捗させることを好まない。種々の口實の下にわが漁船の活動を阻止しようと企てつゝある。こゝにソ聯側の壓迫を排除するためにわが驅逐艦が漁船の保護にあたる

のである。本書の著者佐藤光貞氏は驅逐艦波風の乗組員であり、一等水兵であつて、昭和九、十、十一年の三ヶ年に互り北洋の警備に従事し、カムチャツカより千島にかけて明け暮れを海上に送つて貴重な體驗を重ねて來た。本書は日記の形式によつて驅逐艦乗組員の勞苦を傳へたものである。我々は本書によつて、北洋に於ける我が漁業の圓滑な遂行にはかゝる人に知られぬ海軍の努力が伴つてゐることを知ることが出来る。著者の輕妙な筆致は所謂玄人の壘を摩するもので愛讀措く能はざるものである。

支那海

佐藤光貞 著

四六判 二〇五頁 一・二〇 英語通信社

「北洋」を世に贈つて、その才筆を謳はれた著者は一轉して支那海の海上封鎖に参加し、こゝに再び「支那海」一卷を世に問ふた。支那事變も今や第四年目を迎へてゐる。その間、支那海二千八百五十哩に互つて航行遮斷、海上封鎖を繼續しつゝある海軍將士達の不斷の勞苦は思ふに餘るものがあらう。そこには陸戦の花々しさがない。もとより航空隊の爆撃行の如き眼醒しさもない。然も晝夜を分たず續行される哨戒見張は、その孰れにも劣らざる努力の繼續である。襲來するものは風雪であり、波浪であり、暑熱である。そこには花々しく砲門を開いて敵を撃つやうなことはない。凡てが地味であり、椽の下の力持ちの感がある。然もその任務の重要さはもとより贅するまでもない。「支那海」一卷はこの地味な任務に黙々として忍従する將士の艦上の生活を如實に傳へたものである。我々は數多い戰記文學の中に是非ともこの一冊を加へねばなるまい。

善人村

吉田絃二郎 著

四六判 一六九頁 〇・七〇 日本青年館

永遠に青年の良き友である吉田絃二郎氏が嘗て「青年」誌上に發表された五篇の戯曲と、ラヂオの放送臺本「善人村」を編んで一卷とされたものである。その孰れもが青年諸君の手により上演されることを眼目としたところに特徴がある。従つて單なる讀物としてみるならば、巻頭の「大山元帥」の外は必ずしも優れたものとは云ひ得ないかも知れない。然しこれが一度、青年諸君に消化され、自家藥籠中のものとされて、農村の集りなどの餘興として上演されると忽ち精彩を放つものであることは云ふまでもない。さうした點で極めて平易に、誰の手によつても舞臺に上げることの出来るやうに構成されてゐる。

但し「大山元帥」は單にさうした意味でなく、一編の戯曲としても堂々たるものであり、さればこそ奉天戰三十周年にはこれを記念して東京劇場に於て上演されてゐる。大山元帥の偉大さが二幕三場を通して太い一線を劃して描き出されてをり又旅順攻略戰に苦闘した乃木將軍の苦衷がしみじみと傳はつてくる。著者の作家としての手腕を充分に示したものである。本書は叙上の如き意味で青年諸君の書架に加へたいと思ふ。

續建設戰記

上田廣 著

四六判 三三七頁 一・五〇 改造社

「建設戰記」は山西の鐵路を守備する水間部隊の活動を描いたもので、素材、重厚の筆致を以て著者上田軍

曹は列車を襲撃する敵兵を描き、之と應戦しつつ線路を布設し、鐵橋を構築する鐵道部隊員の苦闘を活寫した。本書は同じく、隊員の臨汾駐在記である。水間部隊の各部隊は沿線の各驛に駐屯し、驛を護り、線路を守りつゝある。然しその各驛はいづれも敵兵によつて遠巻きにされてゐる。支那軍は常に夜襲を試みる。そして夥しい遺棄死體を放置して退却する。本書の大部分は水間部隊本部の臨汾に於ける和やかな明るい守備生活であるが、しかしそのクライマックスはその敵の夜襲である。著者は前著と同じく、再び重厚の筆致を以て戦闘を活寫した。「建設戦記」は正續二冊を以て完結した。今事變を記録した數多い報告文學の中で、「建設戦記」の價値こそ最も高く評價されるべきである。

百 姓 記

吉田 十四 雄 著

四六判 四二六頁 二・〇〇 牧野書店

著者は二十餘年間、北海道十勝の平野で農耕に従事してゐる人で、文筆の人ではない。しかもこの小説を發表して文壇に大きな波紋を描いた。本書の核心を形作る十勝平野の自然描寫と作中の人物の作物に對する劇しい愛情とは、恐らく著者自身の體験を織り込んだものであらうが、實に力強く迫眞力を以て描かれてゐる。最近の讀書界に作家でない、所謂「素人」の書いた作品が歡迎されてゐるが、多くはその題材が、從來の作家の扱ひ得ないところに興味を持たれてをり、その構成も描寫力も必ずしも優れたものと云ひ得ないものが多いが、本書が眞實に文藝作品としての立派さを備へてゐるのは驚くべきものである。

物語は家政の破綻から故郷岐阜を捨てた若い夫婦とその弟三人が十勝の平野に移住して開墾に従事する姿を季節を追ふて描いたものである。物語では夫婦が郷里へ錦を飾つて歸省することになつてゐるが、かゝる蛇足はともかくとして、二十年前に於て十勝平野の開墾に従事した先驅者達の姿が如實に描かれてゐる。彼等は文字通り空拳を以て、その荒涼たる大自然の中に移り住んで、飢餓と直面しつつ營々として畝を大地に打ちこみ、又森林を拓いた。人間が原始の土に對して生きて行く、いさゝかの餘裕もない生活の厳しさと劇しさが脈々として行間に滲み出てゐる。

海 軍 爆 撃 隊

北 村 小 松 著

四六判 二八九頁 一・五〇 興亜日本社

航空機を主題として扱つた作品を書かせたならば、北村小松氏を第一人者とすべきである。今次事變の發生以來、わが航空隊の活躍は實に目醒しいものである。北村小松氏がこの立派な題材を逸する筈がない。本書に收められた二篇の創作はいづれも實に立派なもので、優れた讀物である。

昭和十三年八月わが海軍航空隊は衡陽の空襲を敢行し、輝く戦果を収めたが、この爆撃行に参加した野中大尉機の活躍を描いたのが「海軍爆撃隊」である。著者は大尉自身の手記と乗組員から直接聞くことを得た實戰譚を基礎として創作の筆を揮つたものである。衡陽上空に於ける空中戦の息づまる激しさが眼のあたりに見るが如く描かれ、又乗組員の死に直面して義務を死守せんとする氣魄が見事に傳へられてゐる。他の一



篇「渡洋爆撃隊」はわが海軍航空隊の歴史を書いたもので、霞ヶ浦航空隊の創設より、南京に渡洋爆撃を決行するに至るまでのわが海軍航空隊の躍進の経路を跡づけたものであり、先人達の血に滲む努力と犠牲とが今日の偉大を築きあげる迄を描いたものである。二篇ともいかにも優れた作品である。

おくのほそ道の記

吉田 絃 二郎 著

四六判 二六八頁 一・八〇 實業之日本社

「旅に病んで夢は枯野をかけめぐるといふ句は芭蕉の最後の句であるが、芭蕉と旅とは引離して考へることが出来ない。「片雲に誘はれて」と芭蕉は書いてゐる。一つの旅を終へた芭蕉は直ぐ次の旅へと出かけてゐる。凡てを放下して無一物となつた彼が漂々乎として、行く雲の如く旅行く姿を想像してみると、我々の生活の底を流れてゐるものに何か共感するものがあるのを禁じ得ない。もとより我々の生活が一藁一笠となつて漂泊の旅をした芭蕉の生活と同じ筈もないし、又さうであつてはなるまいと思ふ。しかし生涯を旅に終へることを願つた芭蕉の心境には我々が學びとつていゝ一脈純粹なものがある筈である。相馬御風氏の隨筆の中に戦場を馳驅して砲火に身を逞して顧みない將兵達に良寛が喜ばれてゐるといふことが書いてあつた。緊迫した生活に終始してゐる我々にとつて谷川のやうな清冽なものを傳へられる芭蕉の藝術は有難いものである。しらす。芭蕉の作品の中で代表的なものゝ一つである「おくの細道」は誰にでも讀まれてよいものである。しかしその名文はそのまゝではなかく理解できないところがある。そこで現代の芭蕉ともいふべき吉田絃二

郎氏がこれを平易に解説されたものが本書である。我々は著者の親切な説明によつて芭蕉の生涯を劃したこの大旅行について充分の理解をもつことが出来よう。

大地と共に生きん

石川 達三 著

四六判 二三〇頁 一・二〇 青梧堂

昭和十二年正月より「青年」誌上に一年間に互り連載されたもので、既に號を追つて愛讀された諸君もあることと思ふ。土を愛し、土に生きんとする農村の人達の精神を一編の物語によつて描き出したものである。物語は、借金の抵當として我が耕地を奪はれた農村の兄弟が、陰忍自重し、最後に怨讐を越えて耕地の奪取者である工場主の命を救ひ、再び耕地の返還を受けるのであるが、その間、點するに父の借金の抵當として工場主のために美しい戀を失ふ可憐なる乙女があり、耕地の買収問題に結束して起つ村民の憤怒があり、波瀾に富んだものである。著者は第一回芥川龍之介賞を受け、健筆を謳はれてゐる。

りんふん戦話集

上田 廣 著

四六判 二四七頁 一・五〇 河出書房

「建設戦記」といふ息づまるやうな迫力の漲つた長篇小説を發表した上田軍曹は同じく臨汾駐屯に取材したいくつかの短篇を書いてゐる。本書はこれらの短篇を収録して一巻としたものである。流石に短篇だけあつ

て「建設戦記」のやうな緊張した調子に代るに、寛いだ、氣輕な調子で書かれてゐて、讀者も亦氣輕に讀むことが出来る。短篇の多くは、わが將兵を描くよりは、主として支那の民衆や、投降して今はわが軍のために協力してゐる協和軍の兵士達のこと、が書いてある。巻頭的一篇の如きは、現在は宣撫班として活動してゐる支那軍の女兵士のこと、が書かれてゐる。支那の民衆が皇軍に對して如何なる感情を抱いてゐるか、或は協和軍の兵士達が嘗て銃を向けて抵抗した皇軍と今は朝夕を共に暮しつゝ如何なる思想を抱いてゐるか。又かうした民衆や投降兵を善導するために如何に皇軍の將兵が努力しつゝあるかを本書の各短篇は如實に傳へてをり、戦闘の記録とは異つて我々に示唆するところの多いものである。

火の赤十字

松 坂 忠 則 著

四六判 二七〇頁 一・三〇 弘文堂

數多い支那事變を描いた報告文學の中で「火の赤十字」は最も優れたものゝ一つである。然も本書に描かれてゐるのは野戦病院隊であり、第一線の直後にあつて、負傷者の看護に當る隊員の貴い心情と不眠不休の努力を書いたものである。この野戦病院隊は漢口攻略戦に長江南岸を進撃する覆面部隊に屬し、これは九江に上陸して瑞昌を経て箬溪に達するまでの記録であり、特に合掌街に於ける敵との遭遇戦の凄じさが重心となつてゐる。隊員の使命はいかなる場合にも入院患者を敵から守らねばならぬ絶體責任を負つてゐることである。彼等は患者の看護に當ると同時に、來襲する敵に備へて銃剣をとつて病院を護らなければならない。然

も彼等は死を乗り越えて、いさゝかもたじろぐことがない。その言動は常に諧謔に満ちてをり、無邪氣である。

更に本書の特色は五百字以内の制限漢字を以て書かれてゐる點である。著者はカナモジ會の主事である。その意味でも本書は注目されなければならぬ。

續分隊長の手記

棟 田 博 著

四六判 二八〇頁 一・三〇 新小説社

棟田伍長の「分隊長の手記」は本目錄の第二十一輯に既に紹介されてゐる。同書は陵縣より出發した赤柴部隊が濟南に入城するまでのことを記録したものであつた。そして同書は戦争文學の中で最も多く讀まれ、最も人氣のあつたものゝ一つである。その理由は同書を讀まれた諸君には直ぐ理解できることと思ふ。その特徴は戦線にある將兵の日常生活が如何にも生々と書かれてゐる點である。それが極めて正直に、素朴に、明朗に描寫されてゐる點にある。死生の巷に往來する將兵達の死を乗り越へた澄んだ心境が、その無雜作な、諧謔に富んだ生活を通して、しみじみと感じられるところにある。赤柴部隊は濟南へ入城してから更に徐州戦線に向つて進撃を開始した。本書は即ちその間の出來事を前書と同一の筆法で書いたものである。「分隊長の手記」は二冊になつた譯である。我々はこの二冊目をも一氣に讀み終らなくてはなるまい。

庄内平野

丸山義二著

四六判 三六九頁 一・五〇 朝日新聞社

農村文學が提唱され出してから農村に取材した作品が數多く創作されてゐる。都會に偏つてゐた文學が農村を創作の對象にしてきたことは大いに意義がある。然しその作品の多くが大きな缺陷を藏してゐた。第一は自然主義的な態度が揚棄されず、兎角農村の暗い、傳統的に悪い部分を取りあげようとした。勿論かゝる創作態度は排除すべきものである。農村文學はもつと建設的な面を對象としなくてはならない。さうした要求に應じて、第一に分村運動を主題とした作品が生れて來た。本書はかゝる作品の代表作の一つである。分村運動がわが農民史に如何に劃期的な事業であるかは贅言するまでもない。故國の土を滿洲の土と換へて、一路王道樂土の建設に參ずる拓士の勞苦は實に貴いものである。本書は先驅移民の先鞭をつけた山形縣大和村の分村運動を描いたものである。耕すべき土地を持たない小農の苦惱は青年を中心として湧き起る分村運動によつて初めて解決をみたのである。しかしかゝる見事な成果に至る迄に青年達の拂つた苦闘は實に貴いものである。本書はその成果への道程を描いてゐるが、同時に庄内平野に於ける四季の推移と之を背景とする農民の生活が適確に描寫されてゐる。

産業

國家と農村

小野武夫著

四六判 二二二頁 一・四五 地人書館

内容は三つの篇に分れてゐる。第一篇は「日本國家の興隆原理」と云ふので、こゝでは主として我國農政家の大先達である佐藤信淵の國家思想、農政思想、經濟思想が平易に説明されてゐる。信淵は幕末日本の生んだ大思想家で、彼の國家論、國土經緯論は進んで東洋經綸論にも及び、現下の時局には誠に示唆に富んだものである。次は「非常時局下の農村生活」と云ふので、著者専門の農村部落研究の片鱗を窺はせるものである。實地踏査に基いてなされた農村生活研究、農村に著れた偉人の研究の類が收められてゐる。第三篇は「農村改革と東洋思想」と云ふのであるが、最近しきりと問題にされてゐる「國土計劃」を中心にして農村改革を論じてゐる。その論旨に於ては第一篇の佐藤信淵の「國土經緯」論並にそれから派生した東洋經綸の思想に負ふ所が多いようである。著者は農學博士、農村研究者として著名であり、幾多この方面に關する名著を有つて居られる。本書の記述は極めて平易で誰にでも讀み得るものである。

時局農村讀本

中農俱樂部編

四六判 三九四頁 一・九〇 地人書館

編者である中農俱樂部が主催して開設した特殊農村講座の講演速記である。この講座は、經濟再編成期に直面してゐる現在の農村に於ける問題を、あらゆる角度から考察したもので内容が極めて多岐に亙つて居る。従つて之を講演として一度に聴講して了ふより、本書の様に一冊の本として順次に讀んで行く方がより効果的ではないかと思ふ。講演者は何れもその道の専門家と云ふよりは寧ろ責任者である。左の目次に依つて項目並に講師を知られ度い。

- 國民經濟の再編成と農業
- 物價統制の現在及び將來
- 農産品の配給統制
- 農村金融の現状と其の將來
- 産業組合の指導精神と今後の問題
- 農地問題と時局的對策
- 肥料問題の重點と其の將來

- 中央農林協議會 理事 三宅鹿之助
- 常任理事 西村彰一
- 商工省物價局長 本多佐七
- 第三部部長 窪田角一
- 全國農産物販賣協會理事 德永清次
- 全國農産物販賣協會理事 田邊勝正
- 産業組合中央金庫調査課長 島田日出夫
- 産業組合中央會 事務局長 杉野忠夫
- 農林省農務局 小作農務官 川村和嘉治
- 農林省農務局 小作農務官 川村和嘉治
- 全國購買組合聯合會調査課長 川村和嘉治

實用農藝全書 第一八、二〇

明文堂發行

特小判 各一・二〇

- 食糧問題の現状と其の將來
- 畜産界の現状と今後の問題
- 蠶絲業の現状と其の動向
- 山林問題と時局的對策
- 水産業と戰時統制下對策
- 滿洲開拓への新しい動向
- 東亞農業プロックの一課題

- 企畫院調査官 勝間田清一
- 農林省畜産局長 岸良一
- 前全國養蠶組合聯合會主事 片田銀五郎
- 前産業組合中央金庫理事 田中長茂
- 農林省水産局長 遠藤三郎
- 水産課長 杉野忠夫
- 滿洲帝國開拓總局參事 川村和嘉治
- 中央農林協議會 常任幹事 川村和嘉治

- 第一八 作物病虫害
- 第二〇 果樹病虫害

- 武内晴好 著
- 織田富士秀 著
- 瀧元清夫 著
- 織田富士秀 著

前輯に掲げた同じ全書の「蔬菜病虫害」の姉妹篇をなすもので、「作物」の方は米、麥の普通作物は固より、桑、茶、煙草、藺、こんにやく、甘藷、百合、棉その他の特用作物について病害と虫害を別項目に記述してある。「果樹」の方は苹果、梨、桃、柿、葡萄、柑橘、枇杷、梅、無花果、櫻桃、栗等で、病害と虫害とを別項にし

である點「作物」と同様である。勿論兩方共作物全般、果樹全般に互つての總論的記述もあり、作物並に果樹栽培に於ける病原と害蟲を知つて之が防除に力めることを本書の目的としてゐる。

聞く所に依ると我國農作物の被害は年額一億圓にも及ぶと云ふ。之は誠に憂ふべきことで、農産物の増産が重大問題である今日、安閑として之を放置すべきではない。諸君等に於かれても無論充分の注意はして居られるであらうが、尙參考にもと思つてこの二書を掲出しておいた。著者は何れも専門家で、武内氏は朝鮮總督府技師、織田氏は福岡縣立農事試驗場技師、瀧元氏は九州帝大植物學研究室に居られる専門研究家である。

厩 肥

麻生慶次郎著

四六判 一六九頁 一・七〇 子安農園出版部

著者をして云はしむれば、我國に於ける販賣肥料の消費額は年を逐ふて増加して行くが、自給肥料の消費額は之れに伴ふて増加して居ないとのことである。販賣肥料の主なものには礦物質肥料であるが、礦物質肥料の偏用は決して地力を増進しないことを著者は警告してゐる。自給肥料と云へば厩肥、堆肥、綠肥等であるが、之等の自給肥料と兩々相俟つて、と云ふよりも經濟的合理的施肥法は寧ろ自給肥料を基本として、その足らざる所を販賣肥料を以てすると云ふ方策を探るべきである。その意味で本書は自給肥料中質量共に最も優れたる厩肥について、その成分を分析して優れたる所以を明かにし、厩肥の製作法、使用法並にその效用を平易に述べてある。農産物の増産が叫ばれてゐる一方、之に要する肥料問題のやかましい折柄、農村の諸

君には重要な主題ではないかと思つて一本を掲げて見た。著者は農學博士で東京帝國大學名譽教授である。

和牛の改良と登録

羽部義孝著

菊判 二二二頁 二・五〇 養賢堂

次掲「和牛の飼方」に比して稍々程度が高い。最初に昭和十三年以來實施されてゐる和牛の中央登録について論ぜられてゐるが、以下は「和牛の改良と其の動向」「和牛の飼育」「和牛の早熟晩熟と産地の特色」と云ふ一般的主題が採られてゐる。次掲「和牛の飼方」が和牛飼育の一般的方法を記したのに對して、本書は主として和牛の改良問題が扱はれてゐる。著者は京都帝大教授、農學博士。

最新和牛の飼方

高橋正治著

四六判 二六七頁 二・〇〇 有誠堂

和牛飼育の入門書で、和牛の沿革、牛體の構造並に生理、和牛の種類、蕃殖育成、飼養、管理、牧野、和牛の鑑定の八章に分たれてゐる。著者は廣島縣立上下農學校教諭。

緬羊飼育相談

惣津律士著

四六判 二九五頁 二・〇〇 賢文館

666

102

畜産相談叢書の一つとして刊行されたものである。今次事變を契機として、日滿支を通ずる羊毛生産力擴充計畫が樹立されたが、勿論本邦の緬羊事業はその中樞でなければならぬ。之は最近に於ける羊毛の軍需民需兩方面の大激増に鑑みて農村將來に投げられた重大な問題である。

本書は緬羊飼育の實際に就いて比較的詳細に述べられたもので、記述の形式が質疑應答の形になつてゐる。例へば「哺乳上の注意を御教示下さい」と云ふ質問を設定して、之に回答を與へる形式で哺乳上の注意を與へてゐる。この様にして、この質問に體系を立て、全體を總論、緬羊飼育經營、緬羊の種類、緬羊の審査、飼育に關する設備、蕃殖、育成、飼養管理、飼料、疾病、緬羊生産物、羊毛、仔緬羊、羊肉、羊皮、羊肥の十六章としてゐる。この記述の形式が何となく本書の内容をやはらかくしてゐる。

兎の飼ひ方

橋爪敬三郎 著

四六判 八九頁・四〇 日本青年館

養兎は一時非常な流行で、輸出品としても重要なものになりつゝあつた。更に今次事變に際しては、軍の必需品として輸出を禁じ、農村に養兎を奨励して今や國家的重要産業の一となり來つたのである。所が中には事變が終つて了つたら軍需品として不要になり、従つて今から飼つても仕方あるまいと云ふ見方をする人もあらうが、著者をして云はしむれば、軍需品として不要になつても、兎の需要は民間に於ても益々増加し、殊に輸出品としての販路は可成廣く、養兎事業は今後益々發達すべきであると云ふことである。

この本は日本青年館發行の増産叢書の第一巻として刊行されたもので、この種の本としては極めて入門的な簡單なものである。然し必要な知識は全部網羅されてゐるから入門書としては充分間に合ふと思ふ。記述は極めて實際的で然も平易である。

666

102

666
102

666
102

發行所一覽

(推薦圖書は總て日本青年館
需品部出版課で取次ぎます)

朝日新聞社 麴町區有樂町二ノ三
青木書店 澁橋區諏訪町一〇八
英語通信社 本郷區西片町一〇
海軍研究所 麴町區内幸町二ノ二二
改造社 芝區新橋七ノ十二
河出書房 日本橋區通三ノ一
科學主義工業社 日本橋區兜町二ノ十七
賢文館 神田區一ツ橋二ノ五
健文社 牛込區拂方町四
古今書院 神田區駿河臺二ノ一〇
子安農園出版部 橫濱市神奈川區西寺尾町
興亞日本社 麴町區内幸町二ノ二大平ビル
弘文堂 神田區神保町一ノ一
山喜房 本郷區本郷六ノ九
三省堂 四谷區新宿町一ノ八八
三省堂 神田區神保町一ノ一
新教書院 神田區神保町二ノ一三
新小説社 神田區錦町一ノ四
實業之日本社 京橋區銀座西一ノ三
青栞堂 杉並區阿佐谷六ノ一八八
青年書房 神田區小川町二ノ一〇

ダイヤモンド社 麴町區霞ヶ丘三ノ三
地文書館 神田區錦町三ノ二二
千倉書房 京橋區京橋交又點
同盟通信社 京橋區西銀座七ノ一
刀江書院 神田區駿河臺三ノ六
日本放送出版協會 芝區田村町一丁目交又點
日本青年館 四谷區霞ヶ丘町十一
日本青年外交協會 麴町區六番町三ノ四
博文山館 日本橋區本町三ノ九
富山房 神田區神保町一ノ三
婦女界社 麴町區九段四ノ一三
鰯野書房 四谷區荒木町四
牧野書房 麴町區麴町一ノ三
三笠書房 神田區西神田二ノ二一
目治書房 神田區駿河臺二ノ四
明誠書店 神田區駿河臺三ノ一
有文堂 神田區錦町一ノ四
明誠堂 京橋區榎町二ノ五
養賢堂 本郷區森川町七〇
六藝社 神田區錦町一ノ一七

推薦圖書目錄 第二十二輯

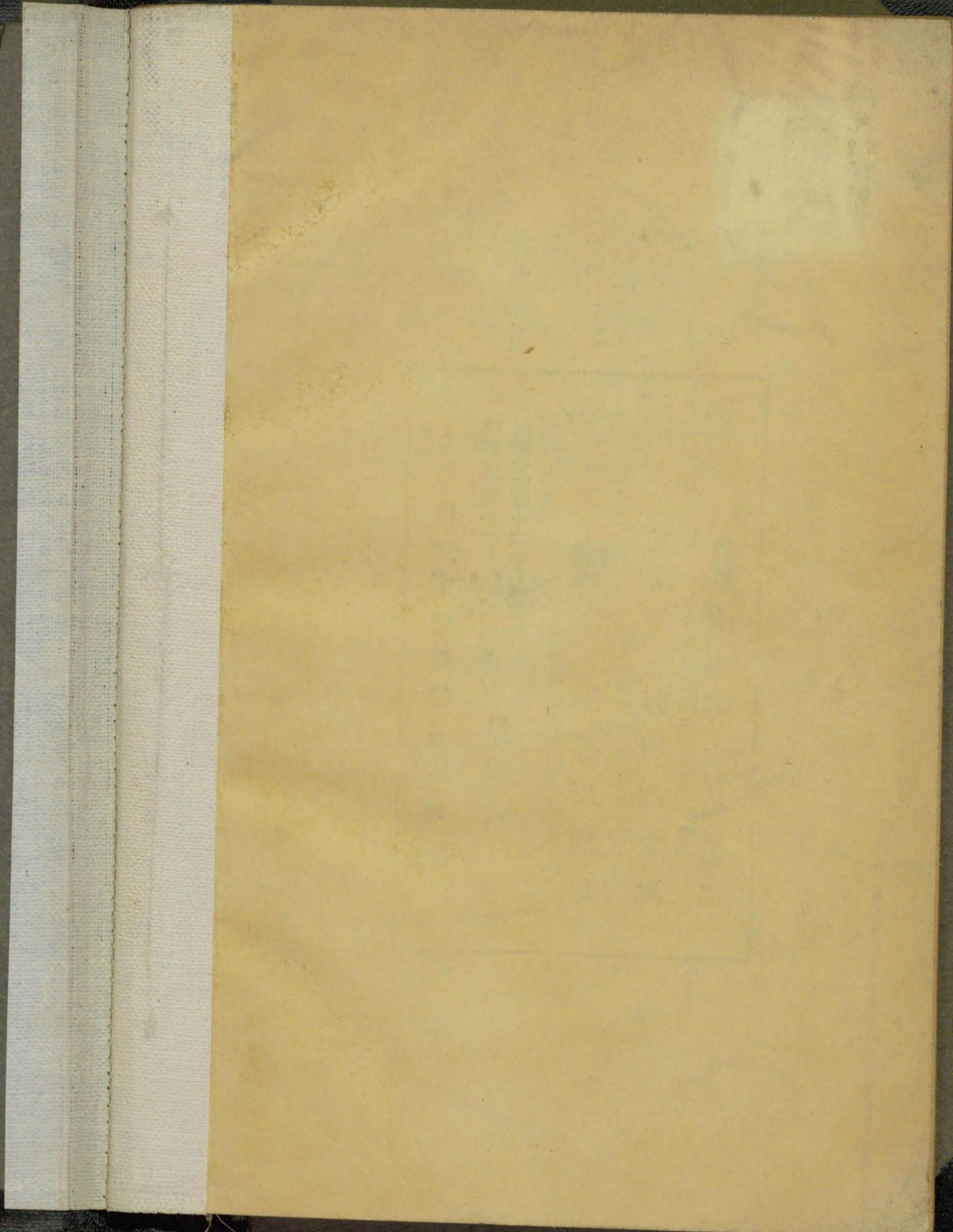
昭和十五年十二月九日印刷
昭和十五年十二月十四日發行

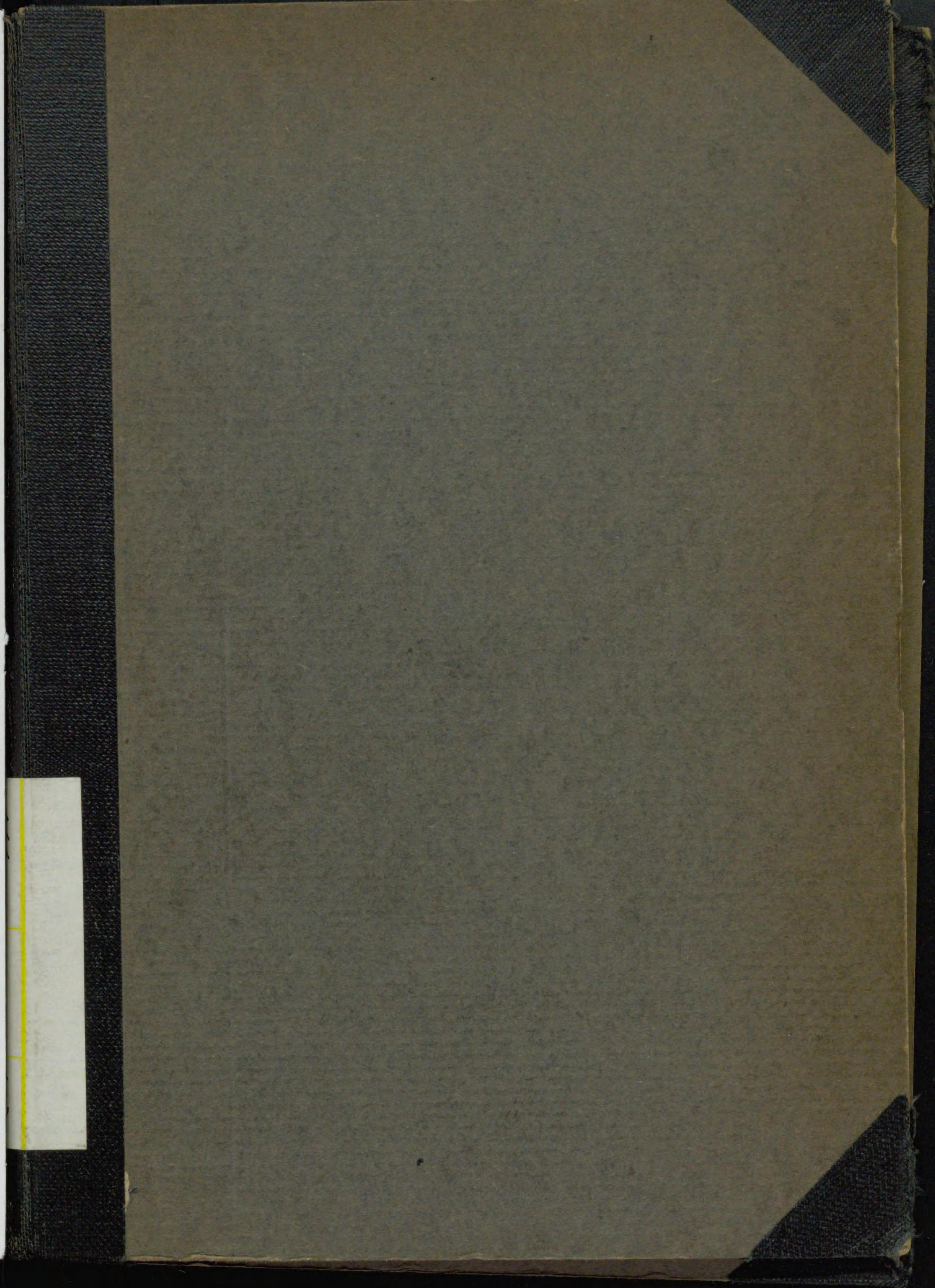
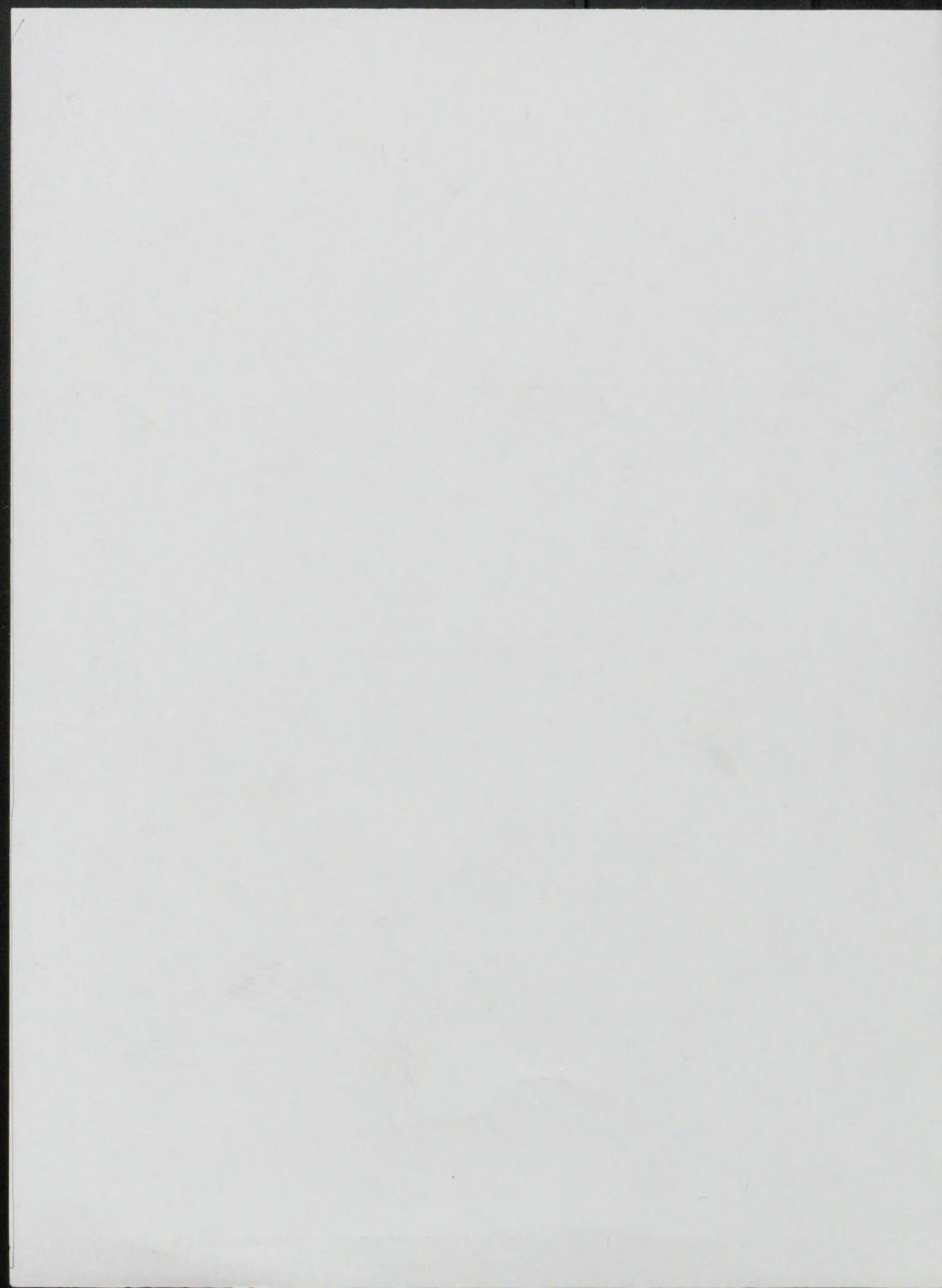
【非賣品】

編輯兼發行者 東京市四谷區霞ヶ丘町十一 熊谷辰治郎
印刷者 東京市麴町區麴町五ノ二 杉田彌太郎
發行所 東京市四谷區霞ヶ丘町十一 大日本青年團本部

行印所刷印屋田杉

666
102



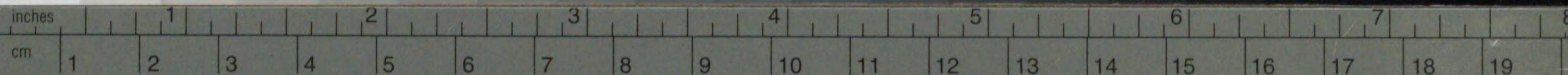


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

